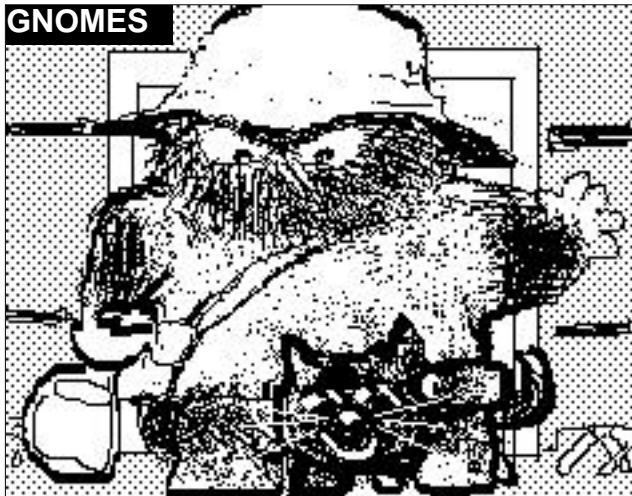


# ノーム通信50

2000-8

〒130 0026 東京都墨田区両国4-30-4-1109

## GNOMES



昨日は夕方の7時から夕日の中を9時まで走り、今日もまた馬の背で一日を過ごした。峠を超え丘を大きく回り込みじりじりと陽に焼かれ水筒の水は完全にお湯となり、けつも膝も痛み、性格の悪い馬と戦い、乾きにあえいだあと草原の井戸にたどり着き生き返って斜面を登り、夕刻、一騎また一騎とキャンプに穏やかな斜面を下って戻ってきた。冷えたビールでまた生き返ったの後、黒い雲が大きく次々に草原の上を渡って行くのを見て一日を終えようとビンとグラスと椅子を持ってゲルの裏へ回るともう生沼さんがスケッチをしていた。大きな空と大地だ。通りかかる友人たちを呼び集める。「おーい、赤か白かどっちがいいー。グラスと椅子を持ってこーい。」陰ってきて、涼しくなった風に吹かれて笑ったり怒ったりしながら話す。「高村さんの馬に蹴られました。」「しょーがねーだろー、あ

いつは気が立ってるんだ振り向いて噛もうとするんだから。」「さっき遠くでしゃがみ込んだか転んだかしている馬があったがだれんだー。」「はーい、私でーす。急にしゃがんじゃって恥ずかしいしどーしていいかわからなくて。」「オユンナさんすてきだった。指先でさっと促すだけでさっと走ってゆくんだもの。」「どーせこっちはみっともないですよ。走ったら鞍にしがみつくと必死ですから。」「走るのにいい方法を見つけたんだ。前の馬のけつをたいてついて行くと楽だぞー。」「さっきの落馬、だいじょーぶだったかしら。」「たいしたことないけど今頃鏡を見てパニックになってるよ、きっと。でも運動神経がいいんだよあれですんだんだから。」「顔からだもんない。」「なんで私の馬だけぶちななのよ。」「いいじゃーないかわかりやすくして。」「私のダンディー今日はなんでおやすみだったのかしら。」「いやんなっちゃたんじゃないの。」「今日のプリンスタワシはどうだったの。」「あの子はもー、家に帰りたくて帰りたくて。」「パイラ君に会えなかったね。」「あの背の高い青年は兵役でウランバートルの東の駐屯地に行ってしまったのですって。ウウ、私のパイラ君悪いこと覚えてこなけりゃいいけど。」「アトエージ大きくなったね。手が長いし、エフボルトの親類かもしれない。」「去年は私より小さかったのよ。でもすっごいおしゃべりね。」「2枚目は無理としても2枚目半くらいにはなるかもね。」犬も加わった。犬柄の良さそうなやつで、でかいが遊んでもらいたくてしかたないお年頃、面白くて離れない。結局岡田さんが「犬を追い払いまーす。このビニールいいですかー。」とビニール袋を持って走り出したが、犬はもう嬉しくて嬉しくて、一人と一匹はしばらくその辺を飛んだりはねたりと走り回っていた。「あれって追い払うという感じじゃないですよー。」「新体操にあんなのなかったっけ。」「いつまでもやってるパーロ。」

そろそろ日が落ちる頃「酒を作っているから見に来ないかっていってまーす。」「どこ。」「馬の柵のすぐ近くのゲルですって。」たぶん昨日のやつだなとすぐ気がついた。昨日急に雷雨になったときゲルの屋根をふさぎ風に飛ばないように暗くなってきた雨混じりの風の中で一生懸命働くずんぐりした男にありがとうとカップ一杯の日本酒を飲んでもらった。一気に飲み干すと明日酒を作るから見に来いという。見るだけはいやだ。たくさん欲しいといって別れた。雨の中でいい笑顔だった。

蒸留したばかりのまだ暖かくうまい酒であった。ちょうどウランバートルから様子を見に来ていた二本木と旅行社の女性のスタッフに通訳してもらって沢山の話しが聞けて良かった。真っ暗になってからゲルから出るとなんだか急に足を抱かれた。見おろすとさっきの犬柄の良い犬が足の間から顔を出して左足でしっかり私の左足を抱えて笑って見上げていた。さっき結局どやしつけて追い払ったのだが。「ごめんごめん、でも遊んで。」ということらしい。そいつの顔をみているとなんだかむしように嬉しくなってしまった。そしてこの日は真夜中まで火を囲んだ賑々しい夜が続いた。明日はウランバートルへ帰る夜だった。

TEL/FAX 03-5600-0195

高村 哲

GnomesJpn@aol.com